

# 随筆

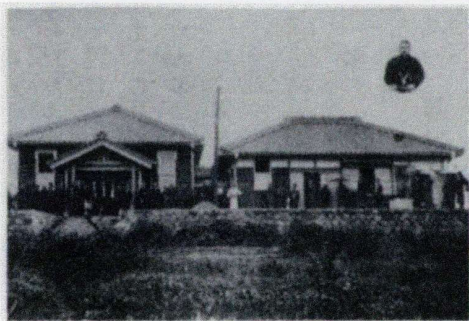
## 津市立病院はわかったが村立病院は？

飯田良樹（久居一志地区）

『三重医報756号』に津市立病院について書かせていただいたが、三重県に村立病院はあるのかな？と疑問が湧いたので調べてみた。

手元の三重県史編纂室より頂いた『三重県史通史編 近現代2』を見ると、衛生医療で「特徴的な病院の開設」を吉村利男氏が書いておられた。県内公立病院は津市立病院のみであったが、1926年、一志郡波瀬村に村立病院が小規模で短期間ながら一農村に設立された。これは1927年統計で全国に9村立病院がありその内の一つとされる。

詳細は、残された役場資料と『波瀬のすがた』を参考され詳しく経緯を書かれていたので、『波瀬のすがた』昭和43年波瀬郷土会と『三重県史』「一志町史」を要約すると、



落成当時の村立病院全景  
左、診療室・右、医師住宅

「波瀬のすがた」より

大正13(1924)年から基本財産の矢頭山林の輪伐が開始されて、その収入を村民の幸福のために村内幹線道路の改修と病院設立使用となる。波瀬村は村内に病院施設がないため伝染病患者や重傷診療は松阪・久居・津方面の病院を頼らなければならなかったが、戦前交通機関に恵まれなかったので、村内に施設の整った病院を設けることが昔から課題であった。

大正13年、村長 向川勇作が「村立病院新設資金積立計画書」を議会に提出、承認決議がなされ

大正14年9月「波瀬村立医院設置規程」が出来る。内容は診療治療及び衛生を行い、看護婦養成所を併設。院長1名、医員1名、調剤員1名、書記1名とある。

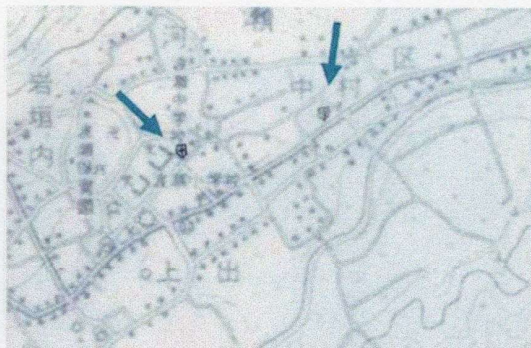
医学博士 横田武一郎が院長となり波瀬中村の空家であった平野千里邸で診療が開始された。『三重県史』では病院開設のため大正14年9月から下刈り15年2月建設工事、6月28日竣工落成式とあるので、落成までの期間を惜しみ平野千里邸での診察が開始されたことがわかる。

初代院長 横田医師は落成までに病氣退職、以降 片岡慶有、小倉 繁、広谷政志が院長を引き継ぎ、加藤秀夫が副院長、林 好美薬剤師、土肥ふさ看護師見習い。

歳入4977円、歳出4703円と最初は黒字であったが昭和5年4月1日から薬価に対する1割補助廃止と木材価値が下落して、病院維持費2000円の村費が耐えられず村営を広谷政志院長個人経営とした。そのかわり、しばらくは一定の手術料や薬剤費を村予算から補助された。

その後、昭和7年 渡辺正村医師、昭和27年 河原林栄一医師が代わり開業したが、昭和38年頃に閉鎖となる。

では、波瀬村立病院は何処にあったか？



『波瀬のすがた』に付けられていた一志町地図の波瀬村中村を拡大したのでボケているが、中村には病院マークが2ヶ所ある。

当時の波瀬村中村で開業されていたのは小淵愛之助先生で、その後小淵一枝先生が継がれた小淵医院が地図の右矢印であるので、波瀬村立病院は左矢印。はっきりとした住所を知りたかったので、久居一志地区医師会に昭和38年頃の医師会名簿に河原林栄一先生が波瀬村で開業されていた住所が掲載されていないか尋ねた。事務長と事務員の方々が三重公報号外昭和36年3月31日に河原林医院は久居で開業される前は「一志町波瀬2258」で開業されていたのを見つけていただいた。

では「一志町波瀬2258」は現在どのような状況か調べると「身体障害者更生事業所」を経て「津市立波瀬老人憩いの家」になっていた。



津市立波瀬老人憩いの家



旧小淵医院

波瀬の医療現状は、小淵一枝先生が亡くなられて小淵医院は登録有形文化財として残されているが閉院され、無医村となってしまった。また波瀬小学校も児童減少のために近郊の大井小学校・高岡小学校と併合して一志東小学校となり、児童は高岡まで送迎バス通学となってしまった。小学校近くにあった駐在所も閉鎖空地となり治安問題も出てきている。

今後どこも抱えている少子高齢化問題の解決が急がれる一例である。

